

令和6年度実践研究奨励援助事業 実施校 研究主題等一覧

■学校課題研究

※園長・校長名は令和7年度

No.	園名・学校名	園長・校長名	研究代表者	研究主題
1	認定こども園 旭幼稚園	井上 智賀	同左	幼小の架け橋プロジェクトの理解
2	宇都宮市立戸祭小学校	松浦 好尚	同左	自ら考え、伝え合い、理解し実践する児童の育成 ～児童が納得と達成感を得られる教師のコーディネート の工夫～
3	上三川町立北小学校	野澤 栄昭	同左	地域とともに目指す「誰にとっても安心して安全な学校」 ～安全文化の醸成のために～
4	栃木市立大平東小学校	新村 勲	同左	主体的に学び、いきいきと表現する児童の育成 ～国語科の授業改善を通して～
5	宇都宮市立陽東中学校	橋本 真己	同左	「校内活性化プロジェクトチーム」によるミドルリーダー 育成
6	鹿沼市立東中学校	湯澤 正弘	同左	「思考力を育成する授業づくり～学習指導と生徒指導を一 体化させた授業を通して～」
7	栃木県立真岡高等学校（定）	加藤 達也	同左	進学・就職支援指導と総合的な探究の時間の融合的活用 に関する研究
8	栃木県立盲学校	平井 謙司	同左	地域で生活する視覚に障害を有する方々への支援 ～とちもう e y e サポートセンターの取り組み～
9	栃木県立国分寺特別支援学校	木戸 朋子	同左	地域とともにある特別支援学校をめざして ～家庭・地域との連携・協働による共生社会実現の土台 づくりから～

研究主題	幼小の架け橋プロジェクトの理解
園名	学校法人双葉学園 幼保連携型認定こども園、旭幼稚園
園長名	井上 智賀

1 研究目的

「幼小の架け橋プロジェクトの理解」

2 研究内容

本園は創立50周年を迎え、今まで多くの方々から支えられ、この日を迎える事ができた事への感謝の意味をこめ、幼稚園教育の理解を深めていただく事を目的に、小学校の先生方に向けた公開保育を計画いたしました。

幼稚園は学校教育法に定められた「幼児の学校」ですが一般的に幼稚園の活動は、園児が自由に活動しているようにも見え、小学校の先生方から見れば「これのどこが教育なのか」という疑問を持たれると推測いたします。ですが幼児期の教育には幼児の特性をふまえ、このような形になっています。

1つは、「個人差の大きい年齢」であります。4月2日生まれから、翌年4月1日生まれで、1年の差がある園児さんが同じ学年として一緒に過ごし、同じ教育（保育）を受ける訳です。この「個人差がある」という前提が幼稚園の基礎になります。

2つ目の問題点です。教科書が使えません。その前に、文字が読めないのです。ですから、幼児期の教育と言え活動による体験が学習の基礎になってきます。

近年、「認知能力・非認知能力」という事が重要視されています。「認知能力」とは簡単に言えば身長やテストの点数のような「数字等で表せるもの」。「非認知的能力」とは、愛情や思いやりのような数字で表せないものです。こ

の非認知能力が人と人が関わり、生活する社会において重要な要素になりますが、この原体験が幼児期の「子ども同士の活動」と考えます。

小学校以上の学習は木で言えば幹、枝、葉と言った「目に見える部分」。幼稚園の学習とは、大きな木になるための、「深く広い根を張るための体験を主体とした学習。目に見えない部分」と言う大きな違いがある、と考えています。

幼小の架け橋プロジェクトとは、この「学習に対するアプローチの仕方」の差を理解する事ではないかと考え、本園の公開保育を通じて、小学校の先生方に幼稚園の保育を理解していただく事を目的に、本研究をおこないました。

研究成果

今回ご参加いただいた小学校は、本園の卒園生が多い学校が主だった事もあり、比較的内容を理解していただいた上でのシンポジウム、バズ討議になったと思っております。細かな点では、活動中に保育者が園児に対して行った言葉かけのタイミング等について活発な意見が交換されました。

4 今後の課題

今回の公開保育は、幼稚園の体験を主とした活動学習の意味と手法などについて、共通理解を持つための入り口であると考えます。これを推進するには、定期的な公開保育や小学校の授業参観などが必要と考えており、今後とも機会を見て進めていきたいと考えています。

研究主題 自ら考え、伝え合い、理解し実践する児童の育成

学校または園名 宇都宮市立戸祭小学校

校長または園長名 校長 松浦 好尚

1 研究目的

学習指導要領では、「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善を推進することが求められている。」とある。本校の実態を見ると、学習課題の解決に取り組み、友達と話しながら考えたり、授業中に発表したりすることが好きな児童が多い。しかし、自分の考えを根拠も含めて説明をするように求めると、話せなくなってしまう児童が多い。本人たちの意欲を大切にしながら、根拠を明確に筋道を立てて説明したり、相手に合わせて伝え方を工夫したりすることができる児童の育成が必要と考えたため、個別最適な学び、協働的な学び、学びをつなげる方法を研究することとした。

2 研究内容

研修主題にせまるために、副主題を「児童が納得と達成感を得られる教師のコーディネートの工夫」とし、算数科での授業実践を通して、児童が自ら問いをもち、課題解決への自分なりの見通しをたてる時間を確保するとともに、各自の考えを生かしながら児童同士が学び合う中で、自分や友達のよさに気づき、全ての児童が課題解決への糸口をつかめるような手立てや具体的な支援の在り方を研究した。

ア 授業づくりについて研究する。

- ・ 単元や内容のまとまりを意識した授業づくり
- ・ 課題設定の工夫
- ・ 数学的活動の充実
- ・ みんなで考え、伝えあう場の工夫

- ・ 納得して考えを整理する場の工夫

- ・ 振り返りの充実

イ 授業づくりを支える取組について各部において研究する。

- ・ 授業研究部

(教師目線に立ち、教師が授業を作る際に必要な内容の研究)

- ・ 基礎基本部

(児童の目線に立ち、授業を受ける際に主体的・意欲的に取り組んだり、また、困り感にアプローチしたり、フォローしたりするのに必要な内容の研究)

- ・ 調査研究部

(児童の実態を分析したり、ICTを活用した授業の研究)

3 研究成果

講話や研修会、授業研究会をとおして、子供たちの関心や意欲を高めるような課題提示、自ら問いをもち、進んで課題解決に取り組もうとする数学的活動の充実とともに教師のコーディネートの工夫を重視した授業を展開することにより、協働的な学び合いや学びをつなげようとする態度が見受けられるようになるなど、取組の成果が表れてきた。

4 今後の課題

子供たちの様相を的確に見取り、指導と評価の一体化が図れるような学校評価の活用や、生活の中で算数を活用する力を高めていくことについてもさらに研究を深めていく。

研究主題 地域とともに目指す「誰にとっても安心で安全な学校」—安全文化の醸成のために—

学校または園名 上三川町立北小学校

校長または園長名 野澤 栄昭

1 研究目的

令和元年に浸水被害をもたらした河川が学区内を流れていたり、学校周辺を幾筋もの用水路が通っていたりと、本校は災害や事故が起こりやすい条件下にある。しかし、教職員の異動等や若返りにより、経験の継承が十分とは言えず、教員の危機管理意識が希薄化している傾向が見られた。そこで、地域の特性及び教育力を生かして、形式化・形骸化しがちな「安全管理」「安全教育」「組織活動」をより実効性の高いものに替えていくことにより教職員の危機管理意識を高めるとともに、児童の安全に関する資質・能力を向上させることをねらう。

2 研究内容

ここでは「石田地区自主防災連合会との連携による防災教育の展開」を紹介する。

3年生「総合的な学習の時間」の単元「安全な町作り」の講師として本校学区内の石田地区防災連合会の皆様をお招きした。（石田地区自主防災連合会は防災功労者として令和6年度内閣総理大臣表彰を受けている。）11月の授業では、連合会のメンバーが過去に学区内で起きた水害の様子を見せながら、防災対策の三本柱とされる「自助」「共助」「公助」の大切さについて説明してくださった。また、災害の時に役立つ簡易的なスリッパを新聞紙で作る体験も行われ児童たちは防災の基礎を学んだ。12月にはこの授業の続きとして、大規模な災害が起きたときに学校の周りで被害が出そうな

危険な場所を、実際に目で見て確認するフィールドワークを行った。（画像1）



（画像1）危険箇所の確認

また、令和7年6月の避難所開設訓練に、この学年の児童が避難者として参加した。これにより2年間にわたる防災カリキュラムの編制ができた。

3 研究成果

- （1）教職員の防災意識の向上。地域の災害の状況や防災の取り組みを知ることによって、学校を取り巻く環境への関心が高まった。また、実践的な避難訓練等を通して、危機管理意識の高まりがみられた。
- （2）地域の学校への関心や地域の教育力の高さが実感できた。
- （3）3～4年生の総合的な学習の時間に、防災学習のカリキュラムを位置づけることができた。

4 今後の課題

災害の恐ろしさを学ぶだけでなく、危機に際した際の判断力を高める「考える防災教育」への転換を進めるようにしたい。

研究主題 主体的に学び、いきいきと表現する児童の育成 ～国語科の授業改善を通して～

学校名 栃木市立大平東小学校

校長名 新村 勲

1 研究目的

本校の児童は、語彙力が低いために、文章の内容や相手の考えを理解できないことや自分の考えを適切に表現できないこと等の課題が見られた。そこで、国語科の授業改善を通して、主体的に学び友達との対話から自分の考えを深め、身に付けた語彙を活用して、進んで表現する児童を育てることを研究の目的とした。

2 研究内容

(1) 授業研究

全ての教員が研究主題に関わる研究授業を行い、事後検討会を実施することで授業改善につなげた。



研究主題に関わる研究授業

(2) 実践の共有化

研究主題に関わる実践についてお互いに情報交換する機会を設け、共有化を図った。



放課後に情報交換する教員

(3) 校内研修の充実

外部講師を招聘した研修を実施したり、模擬授業形式の実践的な校内研修を実施したりすることで、研究主題に関わる知識や指導技能の向上を図った。



外部講師を招聘した研修

3 研究成果

(1) 国語の単元ワークテストの裏「言語」の1年間の平均点が、どの学年も40点以上であった。

1年 46.8点、2年 44.3点、3年 42.7点、4年 44.2点、5年 40.5点、6年 43.2点

特に、5年生は2学期の「言葉」のテストの点数が上昇した。今後も継続して結果を集計し、本研究の効果を検証したい。

(2) 自分の考えを書くときに、教科書巻末「言葉のたから箱」を活用できる児童が増えた。

(3) 分からない言葉が出てくると自主的に国語辞典を引く児童が増えた。より速く辞典を引けるようになってきた。

(4) 基本的な用語や漢字、熟語に関しては習熟を図ることができた。

4 今後の課題

(1) 語彙の量と質の両面の向上が図られたかを評価する方法が難しいと感じた。検証方法の検討が必要である。

(2) 自分の考えを書いたり、意見を発表したりする際に、適切な語彙を用いることが苦手な児童が一定数いるので、本研究を継続していきたい。

研究主題 「校内活性化プロジェクトチーム」によるミドルリーダー育成

学 校 宇都宮市立陽東中学校

校 長 橋本 真己

1 研究目的

近年、働き方改革の推進や校務のデジタル化が加速する中で、ミドルリーダーを含む教職員間の率直な対話や協働の機会が減少しているという課題が顕在化しています。これにより、学校組織全体が共通の目的に向かって効率的かつ効果的に機能することが困難になりつつあり、これは学校運営における喫緊の課題であると認識しています。

2 研究内容

本研究では、前述の研究目的を達成するため、「校内活性化プロジェクトチーム」を立ち上げ、以下の内容に取り組みました。

○現状分析と課題抽出

メンバーによる聞き取り及び教職員アンケートによる現状分析をし、主に教職員間の偶発的なコミュニケーションが生まれにくい物理的・心理的要因を特定しました。特に、煩雑な机上や備品管理による、学年を超えた交流の不足が、組織の一体感を阻害しているという課題を抽出しました。

○空間改革によるコミュニケーション促進

職員室の環境を改善することで、教職員間のコミュニケーションを活性化させることに着手しました。具体的には、ロッカーを個別の木棚に替えたり、別室で業務可能な職員の机をまとめたりし、新たな共有スペースを創出しました。そこでは、教職員が気軽に集まり、意見交換ができるよう、大型テーブルとしました。従来のデスクの配置とは異なり、互いの顔を見ながら対話できるレイアウトを意識して制作しました。

改善前



改善後



○外部講師による校内研修等の実施

外部講師によるオンライン研修は、企業視点での効率的な業務改善策を提示し、教職員の働き方改革への意識向上と具体的な実践への意欲を高めるとともに、東京のライブオフィスへの視察も行いました。



3 研究成果

○コミュニケーションの劇的な活性化

設置した共有スペースは、教職員間の偶発的・計画的なコミュニケーションを劇的に活性化させました。以前は個別のデスクで完結しがちだった打ち合わせや相談が、このテーブルに集まることで、よりオープンかつ活発に行われるようになりました。学年を超えた情報共有がスムーズになり、連携が強化されたことで、校務の効率化にも寄与しています。



4 今後の課題

本研究は一定の成果を上げましたが、持続的な学校活性化のためには、以下の課題に取り組む必要があります。

○ミドルリーダー育成の継続と深化

若手教員の参画意識は高まりつつありますが、今後ミドルリーダーとして学校全体を牽引していくためには、継続的な支援や現職研修の導入が必要です。チーム力を生かし、より複雑な学校課題への対応力を養う機会を提供することが求められます。

○活動の成果の見える化

現時点では、この研究の成果は数値では表しにくい部分が大きいです。しかし今後は、教職員へのアンケート結果や業務の効率に関するデータなどを活用して、見える化をする必要があります。交流し意見を言いやすい「職員室文化の醸成」をさらに進める必要があります。

研究主題 「思考力を育成する授業づくり

～学習指導と生徒指導を一体化させた授業を通して～

学校または園名 鹿沼市立東中学校

校長または園長名 湯澤 正弘

1 研究目的

本校の生徒は、自分の考えを書くことやまとめること、相手に伝えること、相手の考えを理解することに課題が見られる。

そのため、各教科における思考力を教員が理解し、その育成のための授業を構想し実践することにより、生徒の思考力を育成することとする。また、自己決定の場を設定し、学習指導と生徒指導の一体化を図りながら、思考力の向上を目指す。

2 研究内容

○各教科における思考力に関する基礎研究

- ・思考力に関する研修会に3名の教員が参加し、各教科における思考力について理解を深め、校内研修で全教員に周知した。
- ・各教科部会において、その教科における思考力について理解し、その育成のための授業について話し合う。

○各教科の校内研究授業を実施。鹿沼市教育委員会事務局学校教育課指導主事を指導者とし、教科ごとに授業研究会を実施した。

○思考力育成のための研修会（全体会）の実施
指導及び講話 宇都宮大学 石塚諭准教授

○思考力育成のための研修会（全体会）の実施
指導及び講話 宇都宮大学 田村岳充助教



○指導実践

- ・全教員が校内①研究授業を実施し、各教科の研究方針に基づいて学習指導案を作成し、研究授業及び授業研究を行い、各教科における思考力の理解を深め、指導の工夫を重ねた。
- ・小研究授業での学びを活かし、毎週1回実施している教科部会において、日頃の授業についても振り返り、授業実践を重ねた。

○研究のまとめ 研究終了

3 研究成果

- ・定期的に学校全体で研究授業を行い、教科の枠を超えて、『思考力を育成する』授業について全教員で学び合うことで、「思考力とは何か」についての理解が深まり、その思考力を育成するために授業において指導の工夫を具体的にイメージし実践につなげることができた。
- ・週1回の教科部会においても、「各教科における思考力を育成する授業づくり」についての研修を重ねることで、各自の実践につながった。また、全教員が研究授業を教科内で参観し合い、授業研究会を行うことで、指導の工夫について振り返り改善を図ることができた。

4 今後の課題

- ・課題として、授業における生徒の反応が豊かになり思考力の向上が徐々に見られるようになってきたが、主体的に思考を働かせたり、深い学びにつなげたりするような課題設定のさらなる工夫が必要である。

研究主題 進学・就職支援指導と総合的な探究の時間の融合的活用に関する研究

学校または園名 栃木県立真岡高等学校 定時制課程

校長または園長名 校長 加藤 達也

1 研究目的

本校では進学・就職支援に力を入れており、これまで一定の成果を上げてきた。今般、進路結果の分析から、低学年からのキャリア教育に課題が見えてきた。かねてから、本校では総合的な探究の時間において進路を意識した課題研究の推進がなされてきたが、より一層キャリア教育（進路部主管）と課題研究（学習部主管）の密接なつながりを持たせ、低学年からのキャリア教育を充実させることを目的とした研究を行う。

2 研究内容

(1) 進路意識の醸成

3・4年生希望生徒を対象として、8月下旬に2日間、民間外部講師による履歴書の書き方講座と面接実戦講座を実施した。また、全学年希望生徒を対象として、夏季休業中に合計4日間を設け、専門学校講師によるSPI講座を実施した。

(2) キャリア教育の実践

進学・就職への意識高揚と新たな気づきを促すことを目的とし「進路キャリア教育」を実施。社会人として活躍、あるいは進学した学校で専門的な学びを深めている卒業生を講師として招き、在校生と座談会を実施した。

(3) 課題研究ガイダンスおよび発表会

生徒の進路意識を高めるため、課題研究の進め方や探究テーマの設定方法を指導するガイダンスを実施し、成果を発表会で共有。進学・就職支援と探究活動を融合させ、主体的な学び

を促進した。

(4) 進路ガイダンス

職業への理解を促す目的で県内大学・専門学校の協力を仰ぎ、出前授業の形式で全学年を対象として実施。各分野の講師陣20名を招き、生徒の興味関心に応じ多岐に渡る分野から2コマずつ受講する形式で展開した。生徒が将来をより主体的に捉えることができる貴重な行事となった。



3 研究成果

これらの取組により、生徒の進路意識が確実に高まり、卒業学年生徒はもとより低学年生徒においても、自らの将来像をより具体的に描きながら主体的に課題研究に取り組むとともに、進路関係の行事に一層高い意識で臨むようになるなどの行動変容がうかがえた。

進路部と学習部が連携し、より体系的かつ継続的な指導体制を構築することで、低学年からのキャリア形成支援を効果的に充実させることができたと考える。

4 今後の課題

今後は個別支援の充実を図るとともに地域・企業との連携をさらに強化することで、より実践的なキャリア教育の展開を目指し、学校全体で進学・就職支援指導の質的向上を図っていく。

研究主題 地域で生活する視覚に障害を有する方々への支援

—とちもう eye サポートセンターの取り組み—

学校または園名 栃木県立盲学校

校長または園長名 平井謙司

1 研究目的

インクルーシブ教育が推進され、本県でも、地域の保育園・小中高等学校等に視覚に障害を有する乳幼児・児童・生徒が通園・通学するケースが増加しているが、本校からの支援が十分に行き届いていない現状があった。また成人者相談でも、途中で視覚に障害を有した方への対応は十分とはいえない状況であった。こうしたことから本校では、2024 年度から「とちもう eye サポートセンター」を立ち上げ、相談支援活動の充実を試みている。本研究では「とちもう eye サポートセンター」で行う様々な相談支援活動の在り方について明らかにし、さらなる充実を目指したい。

2 研究内容

(1) 「とちもう eye サポートセンター」の理解啓発活動

- ・各関係機関などに出向き、リーフレットを配布。支援が必要な方に対して情報提供を依頼

(2) 関係機関職員等に対する研修会の開催

- ・対面やオンラインでの研修の実施

(3) 育児学級やサタデースクール、弱視特別支援学級等オンライン交流会の実施

- ・保護者同士の仲間作り、同じ障害種の友達の存在を知り合う機会の設定

(4) 乳幼児教育相談、児童生徒教育相談、成人者相談、巡回相談、通級による指導の実施

- ・学校等支援、対象児童生徒への自立活動の指導、個別相談における各種情報提供

(5) 教育と医療、福祉との連携

- ・栃木県ロービジョンネットワークへ参加や当事者団体、各関係機関との連携

(6) とちもう eye サポートセンターに関するアンケートの実施と今後の活動に関する検討

3 研究成果

「とちもう eye サポートセンター」について理解啓発活動を行ったことにより、当事者家族や関係機関職員などから、支援に関する問い合わせがこれまでよりも多く入るようになり、特に成人者相談は昨年度の 3 倍の相談件数となった。各関係機関と連携をしながら、地域で生活する方々に対して継続した支援を行うことが可能になったり、相談をきっかけに本校入学を検討するケースがみられたりしている。

4 今後の課題

(1) 本校は宇都宮市の中心部から離れたところにあり、育児学級や成人者相談では、来校が困難で相談が十分に行うことができていないケースがある。相談希望の方々が気軽に、平等に相談を受けることができるよう、通院する病院や地域保健センター、居住する地域の学校等での相談活動ができるようにしていくこと。

(2) 盲学校の全国的な状況として在籍者数は減少しているが、地域の幼稚園・保育園、小中高等学校等で生活する幼児児童生徒が増加しており、インクルーシブ教育を推進していく上で、センター的機能の充実が求められている。地域においても、専門的な支援を適切に受けながら生活することができるよう、盲学校の支援体制を拡充していくこと。

研究主題 地域とともにある特別支援学校をめざして～家庭・地域との連携・協働による
共生社会実現の土台づくりから

学校または園名 栃木県立国分寺特別支援学校

校長または園長名 校長 木戸 朋子

1 研究目的

本研究は、地域とともにある特別支援学校づくりを推進することで、地域とのつながりを深め、連携・協働しながらよりよい学校教育を実現していくとともに、障害のある子どもたちが地域社会の中で積極的に活動し、その一員として豊かに生きていくための土台づくりを進めることを目的としている。

本校は小・中・高等部及び訪問教育学級を設置する知的障害特別支援学校であり、通学圏である2市2町（小山市、下野市、上三川町、野木町）との連携は重要な課題である。このため、今年度から校務分掌に特別活動部地域連携係を新設し、効果的・効率的に取り組むを展開することとした。また、学校運営協議会制度を導入し、学校運営について家庭、地域等に参画いただくとともに、連携・協働を一層進めていくこととした。

研究に当たっては、本校に在籍する子どもたちについて地域の方々と認識を共有した上で地域でどのような子どもを育てるのか、何をどのように実現していくのかなど、目標設定や役割分担を明確にしていく。また、取組の成果について、家庭や地域、各学校に積極的に発信していくこととした。

2 研究内容

本研究は、地域の中で積極的活動し、その一員となるために学校運営協議会を活用し以下のことを実施した。

- (1) 「地域をきれいにし隊」活動報告
 - ・マリーゴールドの花を育てる活動、地域の清掃活動
 - ・地域の方々との目標設定や役割分担の確認
- (2) 「地域とともにある特別支援学校～児童生徒・保護者が安心して地域で暮らすために～」をテーマとした熟議の実施
 - ・保護者へ生活や将来のことについての困り事や悩み事のアンケート
 - ・アンケートを基にした熟議
- (3) 令和7年度活動計画の承認

3 研究成果

地域とつながり、地域資源を活用した教育活動が充実した。地域の中で児童生徒が活動することで、児童生徒の社会性や主体性が育まれた。また、地域の方々に児童生徒を知っていたく機会となった。

- (1) 地域連携だより「国特タイムズ」
- (2) 「地域をきれいにし隊」の実施
- (3) ヘアカット講習会、ヘアカット会の実施
- (4) 企業・福祉施設との連携
- (5) 作品展
 - ・おおぞら作品展（学校広報作品展）の開催
 - ・常設展示
- (6) 居住地域イベントへの参加
- (7) 下野市青少年育成市民会議への参加
- (8) 下野市社会福祉協議会との連携
- (9) 地域ボランティアの活用
- (10) 児童表彰
- (11) 交流及び共同学習
- (12) 広報（報道関係）
- (13) 広報誌（地域広報誌への掲載）



地域施設での常設展示



ヘアカット会

4 今後の課題

地域の方々に本校生徒について知っていたくことで、地域との連携が広まってきている。しかし、学校が中心となり行っているところが多い。卒業後地域の一員として豊かに生きていくために、障害を有する子どもたちの理解者や応援団を児童生徒の居住地にも増やし、現在学校主体で行っている活動を地域に広げていけるよう、今後も研究に努めていきたい。